

壮春 力歩

With コロナに思う

会長 鈴木 末一

音もたてずにやってきた新型コロナウイルス。知らぬ間に、変異種も水際対策をかわし、上陸していた。切り札のワクチン入手、配布、接種の方法に慌ただしい人間を見透かすかのようだ。

第1波、第2波、第3波と続き、はや1年と2か月が過ぎた。根絶はできない。普段の風邪ひきのように弱いウイルスに変化するのを待つというのが研究者の結論のようだ。それまでは闘いが続く。

油断大敵

闘いの経過を振り返ってみた。最初に罹患したA氏、B氏、C氏は発祥の地、中国・武漢への渡航歴はない。外国人ツアー客との接触があり、A氏とB氏、A氏とC氏は業務で会話があった。感染源は同定できないが、同一空間を共有した「人から人の感染」と推測された。

「MERSやSARSより重症化しない」という安易な見立てが一瞬、世間を安心させ、ウイルスに隙を与えた。事態は悪化の一途をたどる。研究者の声にしっかり耳を傾ける大事な時期だった。ノーベル生理学・医学賞の山中伸弥・京大教授は早くから口酸っぱく言っていた。「ウイルスに油断が一番いけない。1年で終わるなんて甘く考えないように」。

子供たちの頑張り

「全国一斉臨時休業措置（昨年2月27日）、7都府県に緊急事態宣言（同4月7日）、学校の休校は5月末まで延長。日常生活は180度の転換を求められた。在宅勤務のテレワーク、子供たちも大変だった。分散登校、オンライン授業、学校行事の制限」。

これが子供たちの自主性に刺激を与えたのはいい意味で皮肉な結果だった。子供たちは多種多様な課題に直面した。そこに創意工夫が生ま

れたのだ。例えば体育大会。全校児童が相集うのではなく、児童委員会が中心になり学年別に行う。タイトルは「〇〇小学校創立30周年記念大会 秋のオリンピック」。威勢よく掲げる。

授業はコロナ禍で2か月遅れて始まった。「体調を崩さないようにね」「明るく一生懸命に」と、お互いに声を掛け合っていた。行事も例年とは違うメモリアルな物になったようだ。子供たちが困難にもめげず、素直な発想力を随所に発揮していることに拍手を送りたい。

基本を大切に

いよいよワクチン接種が始まった。その効果に大いに期待したい。だが、山中教授が言うように、気を緩めてはいけない。飛沫防止対策、接触感染対策など最も基本的な生活スタンスを忘れてはならない。

不要不急とは

話は変わり、本会の1年を振り返る。まず気になったのは、言葉の解釈の難しさだ。例えば「不要不急」「活動自粛」。前者については、会の通常活動が不要不急かどうか。活動を完全に休止すれば、里山林がどのようになるかは自明の理だ。

議論百出とまではいかなくとも、WITH コロナの対処方法について話し合いを深めることが出来たと思っている。不十分なことがあったとすれば、それはどのようなことで、何に起因していることなのかと、お互いに理解し合い、よりよき状態に一歩ずつ前進できるようにしていくことが大切だと学んだ。

これからも試行錯誤

会議や会合がオンライン化されてきた。ITの進展に伴い、デジタル化への適応力のレベルアップも求められている。これからも試行錯誤の日が続くだろう。

